

## 第8章 紛争研究

伊藤武彦

### 1 紛争の諸理論

紛争とは何か

紛争（コンフリクト）には実にさまざまな種類がある。ヨハン・ガルトウングが、ここ五〇年間取り組んできた一〇〇の紛争のリストがある（表1）[Galung 2008]。

このように、紛争は世界各国でいつの時代にも絶え間なく生じている。また、国際問題に限らず、夫婦の問題やいじめなど、身近な人間関係の対立も紛争と捉えることができる。ガルトウングはまた、紛争を個人内・個人間のミクロレベル、社会内のメゾレベル、国家間・民族間のマクロレベル、地域間・文明間のメガレベルの四つにも分けている [Galung 2004]。英語の Conflict は日本語に対応する語がなく、そのレベルにより、葛藤（主に個人内）、いさかい・対立（主に個人間）、紛争（主にマクロレベルとメガレベル）

表1 ガルトゥングの100のコンフリクト[Galtung 2008]

1	平和研究	26	ソマリア	51	階級とグローバリゼーション	76	米国の世界支配
2	平和サービス	27	ユーゴスラビア内外の紛争	52	世代と持続可能性	77	移民と受け入れ社会
3	平和的防衛	28	ヒンドゥー／ムスリム関係	53	平和博物館	78	EU・民主主義・平和
4	国際平和旅団	29	アノミーとセクト	54	キリスト教と異教徒の関係	79	パッターニ県－アチェ／バンコク－ジャカルタ
5	ピースジャーナリズム	30	スリランカ	55	アフガニスタン	80	ジンバブエ
6	平和省	31	ハワイ	56	アンゴラ内戦	81	英米とイラクの和解
7	平和教育	32	エクアドル・ペルー領土問題	57	サーミ民族(ラップランド)	82	英米とアラブの和解
8	互恵的開発援助	33	マヤ人	58	欧米と非欧米	83	英米とイランの和解
9	南北対立	34	十字軍の癒し	59	いじめ	84	ミャンマーの和解
10	東西冷戦Ⅰ	35	和解(アルゼンチン)	60	男, 女, 結婚, 文化	85	日本と中国・朝鮮半島との和解
11	地域の人種問題	36	3つの欧州	61	英米対イラク	86	ドイツとヘレロの和解
12	キューバ(危機)	37	6つの中国	62	ネパール	87	デンマークとイスラムの和解
13	ノルウェー／ポーランド枢軸	38	北アイルランド	63	インドネシア対東ティモール	88	西側とイスラムの和解
14	チリ・ペルー・ボリビア国境問題	39	コーカサス	64	ナゴルノ・カラバフ共和国	89	トルコとアルメニアの和解
15	キプロス	40	「従軍慰安婦」	65	男と女と結婚	90	カンボジアの和解
16	イスラエル・パレスチナ・中東	41	東西冷戦Ⅱ	66	チアパス	91	靖国神社
17	ジンバブエの独立	42	沖縄	67	判決対調停	92	もう一つの日本外交
18	朝鮮半島	43	ペルー人質事件	68	言語紛争	93	北朝鮮の核爆弾
19	地中海地域	44	ルワンダ	69	市の境界(メキシコ)	94	ミンダナオのモロとキリスト教徒
20	フォークランド(マルビナス)領土問題	45	アルバニア	70	人間に適した技術	95	アルペ・アドリア
21	太平洋地域(パックスパシフィカ)	46	レバノン	71	資本主義対人間性	96	サボナ(ズルー)
22	湾岸紛争1990-91, 1998	47	バスク祖国と自由	72	国家テロ対テロリズム	97	エネルギー転換
23	クルド人	48	ジブラルタル／セウターメリヤ(モロッコ)	73	2000民族対200国家	98	地球温暖化
24	日本・ロシア・アイヌ	49	カシミール地方	74	文明の同盟と衝突	99	地域間紛争
25	日本・米国・琉球	50	コロンビア	75	家父長制度	100	国連

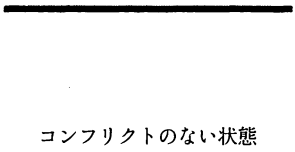

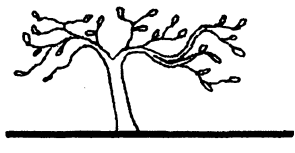

		目 標	
		両立可能な目標	両立不可能な目標
行 動	両立可能な行動	 <p>コンフリクトのない状態</p>	 <p>潜在的なコンフリクト</p>
	両立不可能な行動	 <p>表面的なコンフリクト</p>	 <p>顕在的なコンフリクト</p>

図1 コンフリクトの4つの状況：目標と行動の2×2の表[Fisher et al. 2000]

と訳される。

サイモン・フィッシャーらは、図1のようにコンフリクトの四つの状況を分類している [Fisher et al. 2000]。地面より上の部分は顕在化している「行動」を表し、目標が両立可能かどうかでコンフリクトの種類を二分している。また、地中の部分は「目標（ゴール）」を表し、それが両立可能かどうかで二分している。この2×2の表で問題なのは、コンフリクトのない状態以外の、潜在的・表面的・顕在的なコンフリクト三種類についての対処方法である。フィッシャーらは、これらのコンフリクトに対処する方法として「コンフリクト予防」「コンフリクト決着」「コンフリクトマネージメント」「コンフリクト解決」「コンフリクト転換」の五つを紹介している。この中で、とりわけ相容れない目標で双方が対立して

行動が暴力化している顕在的コンフリクトと、行動は暴力化する前ではあるが目標が両立しない場合の潜在的コンフリクトの両者に対処する方法は「コンフリクト転換」であるとしている。以下に述べるガルトウングのトランセンド法は、顕在化している行動だけでなく、目に見えない、当事者の「態度」と「矛盾」をも含んだコンフリクト転換法である。

### 紛争解決・紛争転換の諸方法

紛争解決の方法として、日本でこれまで紹介されてきた代表的なものとして、ハーバード流交渉術、モートン・ドイッチの協調的紛争解決、そしてガルトウングのトランセンド法がある。

ハーバード流交渉術は、互いの立場よりも利益に重点を置く交渉法である。日本語訳の書籍「フィッシャー／ユリー／パットン、一九九八」や録音教材が入手可能である。彼らの紛争解決は上手に交渉することによって実現するものである。

ドイッチの『紛争解決の心理学』は、対立的な紛争解決と協調的な紛争解決とを対比させたものであり、社会心理学的な理論に基づいて多くの実験などが行われてきた。ドイッチの協調的紛争解決法は、鈴木「二〇〇四」、レビン小林「ドイッチ／コールマン、二〇〇三」等によって紹介されてきた。

ガルトウングのトランセンド法は、日本で最も広く紹介されている紛争解決法の一つである。それは構造的暴力という概念を含め、彼自身の平和学をふまえて政治的・暴力的紛争解決に焦点をあてておられる。同時に、表1のいくつかの項目にあるように、個人的なコンフリクトも対象にしており、包括的である。平和学の立場からコンフリクトの解決を考えるには、きわめて重要だと思われるので、本章では彼

の紛争解決理論であるトランセンソド法に焦点をあてて解説する。

## 2 ヨハン・ガルトウングのトランセンソド法

紛争（対立・争い・もめごと・いさかい）には三つの条件がある。

第一の条件は、紛争には当事者（パーティ）が二つ以上ある、ということである。そして、紛争の当事者はその紛争場面にいる当事者のみならず、その周囲にも利害関係をもった当事者が複数いることが多い。東ティモールの独立問題に関する例題でも、ガルトウングは、東ティモールの指導者やインドネシアの指導者との関係だけでなく、アメリカ・日本・オーストラリア・ポルトガルなどの関係で捉えることを提案していた（ただし、複雑さを避けるために、練習問題などでは二者関係のみを扱うことが多い）。

第二の条件は、当事者の達成しようとしている目標（ゴール）を、それぞれの当事者において明らかにすることである。このゴールのくいちがいやズレによつて、次に述べる対立・矛盾が起こる。

第三の条件は、当事者のゴールに対立や矛盾があるということである。このような対立は、時として暴力による戦争に発展する。暴力的方法による紛争解決でなく、非暴力的・平和的方法による紛争転換を目指すことが大切である。

### コンフリクトⅡA態度＋B行動＋C矛盾

ガルトウングは、コンフリクトの三角形を図2のようにまとめている。

$$\text{コンフリクト (conflict)} = \text{態度 (A: attitude)} + \text{行動 (B: behavior)} + \text{矛盾 (C: contradiction)}$$

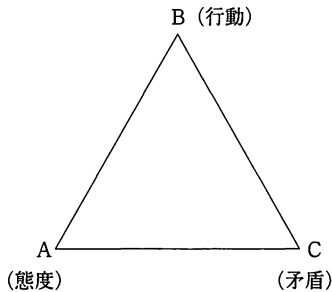


図2 コンフリクトの三角形[ガルトゥング, 2000 : 11]

紛争転換において、大切な図式は、このABCの三角形である。

A (態度) は、偏見や怒り・恐れ・憎しみなどの当事者の心理状態を表す。この態度にも三要素がある。すなわち、恐れや憎しみなどの感情成分 (Affect) と、接近や回避を求める行動傾向 (Behavioural tendency)、そして正当不当、善悪、優劣などの評価や判断をする認知成分 (Cognition) の三成分である。

B (行動) は、当事者の実際の行いである。殺人や武力行使や戦争などの暴力的な行動と、そうでない非暴力的な行動がある。ここでいう暴力的な行動には、身体的暴力だけではなく、言葉による精神的な暴力や性的な暴力も含まれる。われわれが目指すのは、非暴力的な行動による問題解決である。

C (矛盾) は、目標の不一致から生ずる衝突や対立の状態を表す。

目標がぶつかっている状態 (C) が、ゆがんだ心理的態度 (A) や、暴力的行動 (B) の土台なのである。したがって、一見イデオロギーの対立が本質的に見えるような場合でも、その背後にある、つまり、紛争の土台にある目標の不一致によ

る対立(C)という原点に立ち返って、紛争に対処する必要がある。

紛争解決では、A(態度)における「共感」、B(行動)における「非暴力」、C(矛盾)における「創造性」の三つを重視する。

ウィン・ルーズの競争的発想からウィン・ウインの協働的発想へ

伝統的な紛争解決理論には、二者の対立を、ちょうど綱引きのように紅組と白組がお互いに有利なように引っ張り合う状態とみなし、そこから平行線上にある点に妥協点を見出すという考え方がある。ガルトウングの考え方はそれとは違い、一方の目標を横軸の右の方に表し、もう一方のゴールを縦軸の上の方に表す。そして、その横軸と縦軸からなる平面上に解を見出すのである。このようにして求められる五つの解決法を図3で示す。

コンフリクトの五つの基本的結果

図3を見ると、コンフリクトの解決された結果が「A」から「E」の五つの典型的な位置で表されている。これらの五つの解決方法について見ていこう。

[A]、[B] || 一人勝ち (win-lose game) 第一は横軸の右端、すなわち一方の目標だけ実現するやり方である。第二の方法は(第一の方法と同じく)縦軸の上の方の目標だけ実現するという方法である。これらどちらも一方は満足だが、もう一方には不満足な、さらには相手への憎しみが残る方法である。どちらも一人勝ちであり、力による紛争解決であるが、火種は残り、のちにより深い紛争に発展する可能性

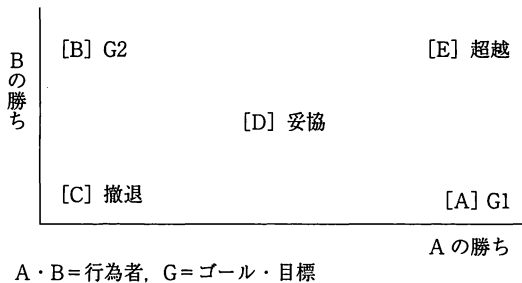


図3 紛争：5つの基本的な結果[ガルトウング, 2000：25]

がある。

[C] || 撤退・先送り (withdrawal) 第三のやり方は、対立を対立のまま放置する、対立をなかったことにする、あるいは全く関係のない人の手に利益をゆだねて、二者の目標がどちらも実現できない場合である。実は、この方法は日常的によく用いられるやり方である。例えば夫婦げんかなど、双方が冷静でなくなり、売り言葉に買い言葉で、(言語的な)暴力がらせんに発展してしまふ。そのまま結論を出さず、翌日落ちてきたときに話し合ってみるなど有効な場合も多い。しかし国際紛争や宗教紛争などでは、放置している間に問題が暴力的にエスカレートすることもある。いずれにせよ、問題解決を直接避ける方略であるから、二者ともに不満が高まっていくことも多い。

[D] || 妥協・折衷 (compromise) 第四の地点は、二者の目標を結んだ斜線の間点である。それは、両者の目標をそれぞれ半分ずつ実現するもので、妥協または折衷とよばれる。対立を綱引きのように考え、引き分けとする見方である。これも双方に不満が残りの火種が残る場合がある。真の紛争解決は、妥協点を見出すことではなく、次に述べるように、超越点を発見し、それにより双方がウイン・ウインの状態になることを目指すものである。

[E] || トランセンド・超越 (transcend) 第五の点は、第一・第二・第三の点を含む長方形の右上の



頂点である。この地点が目指すところの解決点と考えるのがトランSEND法である。これは、二者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決法となっている。そしてこのような解決法を生み出すためには、紛争当事者のみでの解決ではなく、第三者の導入が必要な場合が多い。

### 3 紛争転換のためのコミュニケーション——対話と共感

第三者として調停・仲介する人のことを、紛争ワーカー、または平和ワーカーとよぶ。紛争解決では、まず対立する当事者のそれぞれと紛争ワーカーとが一对一で対話を行う。対話の時間は、二〇分間の場合もあるし、もっと長い場合もある。紛争解決法の中には、いきなり対立当事者同士を同じテーブルにつかせる流儀もあるが、ガルトウングのトランSEND法では、当事者と紛争ワーカーとの対話を重視する。対話では、その当事者がどのような目標を持っているかを聞き出す。その場合、相手の気持ちや主張を理解し、相手の立場を理解する、すなわち、「共感」することが大切である。しかし、「共感」は、自分も相手と同じ意見になり肩を持つこと、すなわち「同情」ではない。ワーカーは自分の意見を持ちつつも、当事者の言い分を理解するように聴く。特に、正当性がないと思われる側の意見を理解することが重要である。

#### 三つのコミュニケーションのスタイル——命令と説得と対話

紛争の解決のためには、コミュニケーションのスタイルについて理解することが必要である。コミュニ

ニケーションのスタイルとして、命令型コミュニケーション、説得型コミュニケーション、対話型コミュニケーションの三つがある。命令型コミュニケーションとは、権力の介在するパワーの関係すなわち上下の関係に基づくもので、例えば、上官の命令とそれに服従する兵士の関係などがある。学校における教師と生徒、裁判所における裁判官の判決や命令、伝統的な親子関係など、秩序の維持を前提とするコミュニケーションのスタイルである。

説得型コミュニケーションでは、双方の結論を譲り合うことがない。雄弁術や論拠の提示や繰り返しなどの技法により、相手方あるいは第三者を説得しようとするコミュニケーションのスタイルである。裁判所による検事の求刑や弁護士の弁護は、有罪か無罪かを争うものであり、双方にとって譲れない結論が先行する。検事と弁護士の説得相手は裁判官である。ディベートという手法も、互いに結論を譲らない論争による説得型コミュニケーションである。このスタイルで、私たちが日常生活の中で最も多くさらされているのは、テレビなどのコマーシャルである。短時間で自社製品を選ぶことを視聴者に説得する、効果的な説得型コミュニケーションが工夫され提供されている。

結論が先決しているこれら二つのコミュニケーション・スタイルに対して、対話型コミュニケーションは、傾聴・共感・結論の創造を目指す。

#### 対話型コミュニケーションの要点——傾聴＋共感＋結論の創造

対話型コミュニケーションの要点は、(1)傾聴すること、(2)共感すること、(3)結論を創造的に生成することの三点である。

(1) 傾聴すること (アクティブリスニング) とは、双方の当事者が相手の主張することをよく「聴く」ことを指す。正当性がないように見える主張の裏にある、真のゴールを理解するために、「聴」という漢字の部首に表れているように「耳」という門でフィルターにかける (＝「聞」) だけでなく、目と心も動員してポジティブに理解することが必要である。それは言い換えると、相手のゴールを理解し共感することである。

(2) 共感すること (empathy) は、同情すること (sympathy) とは違う。共感の *em* という接頭辞は、感情 (Gathy) を入れ込むことであり、感情移入とも訳される。相手の気持ちをいったん取り入れてみることであり、芝居での俳優、問診での医師、面接でのカウンセラーなどに必要な心理的プロセスである。一方、同情は、相手の感情 (Gathy) に同調しシンクロナイズすることである。転んだ子どもに「痛いね」と思いを致すのが共感だとすれば、思わず知らず「痛いねえ」と母親としていつてしまうことが同情、と対比してもよい。共感が相手を尊重し人間相互の違いを前提としているのに対し、同情は断定による人間の類似性 (人間は皆同じ) を前提としている。

貰い泣きやつられ笑いなどは、人間の情動がシンクロした状態であり、進化的には、草食動物に見られる筋緊張による危険信号の伝播などを起源とする。また相手に同調できない場合は反感 (antipathy) が生じる。これは同情の裏返ししの感情である。同情や反感の感情によっては、真の平和的な問題解決の糸口は掴めない。

(3) 結論を創造的に生成することは、命令や説得が一方の結論に相手方を従わせるコミュニケーションであるのと対照的である。当事者と話す場合には、相手の真意を聴き取るとともに、ソクラテスの弁証法を用いること、すなわち巧妙な質問の連鎖により、相手自らが初期に固執していた以外の代案を引き

出すこともある。また、紛争ワーカー同士で創造的代案を出す場合や紛争解決のトレーニングでは、集団による拡散的思考法として、A・F・オズボーンによるブレインストーミングがよく用いられる。ブレインストーミングには、四つのきまりがある「オズボーン、一九七二…一四三」。

(1) 良い悪いの批判をしない（反論や良いアイデアの選択は後で行う）

(2) 「自由奔放」を歓迎する（ケチをつけることは簡単だがそれはしない）

(3) 量をもとめる（アイデアが多いほど良いアイデアが増える可能性が多くなる）

(4) 結合と改善を求める（他人のアイデアを発展、改善する）

これらの方法、特に(1)にあるように、他人の意見を批判しないことは、創造的代案を出すためにきわめて有効である。そして、(3)にあるように量は質を規定する。大量のアイデアを出すことにより、その中から最も適切な結論を創造することができるのだ。当事者の双方とも、当初の目標（ゴール）よりも新しい代案が優れていることを認めれば、非暴力的な紛争解決が可能となるのである。

#### 4 紛争終了後の課題としての和解

最後に、紛争後の和解の問題について解説する。

戦後処理には、終戦を完結する紛争解決（Resolution）と、インフラを立て直す戦後復興（Reconstruction）と、傷ついた心理や人間関係を立て直す被害回復（Rehabilitation）と、敵対した民族や国家間の関係を立て直す和解（Reconciliation）の四つの課題（4R）がある。第二次世界大戦後のドイツと日本を比較すると、

いずれも最初の三つのRは実現したといえるが、四つめのR、すなわち和解の成功不成功では明暗が分かれた。

戦後ドイツは侵略戦争に対し、加害責任を認め、被害者に謝罪し、戦争責任者を処罰し、再発を防止することを周辺諸国に印象づけている。戦後日本は、アジアでの戦争について、侵略であることを認めない指導者があり、被害国民の神経を逆なでするような戦争責任者賛美をしばしば行い、被害者に十分に謝罪していないという印象を与えている。すなわちドイツは周辺国との和解をほぼ完成させているのに対して、日本は周辺国との和解に失敗している。

さてそれでは、和解にはどのような方法があるのだろうか。ガルトウングは次の一二項目を指摘している [Galting 2004: 井上、二〇〇五 a : 七四―八〇]。

- (1) 対立の原因を外部に求める（第三者のせいにする、弁解する）
- (2) 賠償（金銭による和解による癒し）
- (3) 加害者の謝罪、被害者の許し（心から謝罪する、相手を許すことによる癒し）
- (4) 懺悔、宗教的な告白（神からの許しを得ることによる加害者の癒し）
- (5) 法廷での告白（ニルンベルク裁判、東京裁判など、過去の振り返りと精算）
- (6) カルマ（業。間接的な因果関係を含む因縁関係による過去の振り返りと精算）
- (7) 対立の原因を内部要因で検証する（真実和解委員会方式による過去の振り返りと精算）
- (8) 歴史の追体験（ロールプレイや演劇などによる過去の振り返りと精算）
- (9) 悲しみ、癒しを共有する（犠牲者を共同で供養することによる未来の建設）

(10) 共に再建（復興）にかかわる（破壊されたものを協働して再建し、未来を建設）

(11) 将来像を一緒に考える（将来の友好発展を協働して考え未来を建設）

(12) ホーポノポノ的解決（ポリネシア文化に由来した方法。共同体による癒しと過去の振り返りと未来の建設）

以上のように「和解」の意義は、(一)加害者と被害者の癒しと、(二)過去の振り返りと精算の二つの課題に加えて、より積極的に、(三)過去の出来事を土台とした、加害者と被害者の協働による未来の建設の三つとなる。和解を考えるとき、過去のことだけでなく、未来に向けて現在何を共同で実現できるのかという第三番目の課題が忘れられがちである。過去の修復と未来の共同創造をしてこそ、対立は真の意味で止揚・統合されるのである。

◎参考・関連文献

井上孝代、二〇〇五a『あの人と和解する——仲直りの心理学』集英社新書。

——編、二〇〇五b『コンフリクト転換のカウンセリング』川島書店。

オズボーン、A・F、一九七一『独創力を伸ばせ』新版、上野一郎訳、ダイヤモンド社。

ガルトウング、J、二〇〇〇『平和的手段による紛争の転換』伊藤武彦編、奥本京子訳、平和文化。

——、二〇〇三『平和を創る発想術——紛争から和解へ』京都YWCAはーぼの会訳、岩波ブックレット。

ガルトウング、J／藤田明史編、二〇〇三『ガルトウング平和学入門』法律文化社。

鈴木有香、二〇〇四『交渉とミディエーション——協調的問題解決のためのコミュニケーション』三修社。

ドイツ、M、一九九五『紛争解決の心理学』杉田千鶴子訳、ミネルヴァ書房。

ドイツ、M／コールマン、P・T編、二〇〇三『紛争管理論——新たな視点と方向性』レビン小林久子編訳、日本

加除出版。

フィッシャー、R／ユーリー、W／パットン、B、一九九八『ハーバード流交渉術』新版、金山宣夫・浅井和子訳、TBSブリタニカ(二〇〇五、阪急コミュニケーションズ)。

レイダー、E／コールマン、S・W、一九九九『協動的交渉術のすすめ——国際紛争から家庭問題まで』野沢聡子監訳、鈴木有香・中野恵美訳、アルク。

Deutsch, M., P.T. Coleman and E.C. Marcus 2007 *The Handbook of Conflict Resolution: Theory and Practice*, 2, Jossey-Bass.

Fisher, S. et al. 2000 *Working with Conflict: Skills and Strategies for Action*, Zed Books.

Galtung, J. 1996 *Peace by Peaceful Means: Peace and Conflict, Development and Civilization*, Sage.

——— 2004 *Transcend and Transform*, Pluto.

——— 2008 *50 Years: 100 Peace & Conflict Perspectives*, Kolon forlag.

●さらなる学びのために——紛争解決のための練習問題

本章で紹介したブレインストーミング法を使って、みんなで良い解決策を探ってみよう。

問題1 テーブルに男の子が二人座っていて、オレنجが一個おいてある。さて、何が起こるだろう？ これは紛争ワーカーであるあなたがブレインストーミング法に慣れ、協働して創造性を発揮するための問題である。できるだけ多くの可能性をあげてみよう。

問題2 中学生の妹は学期末の試験が全部終わって嬉しくて仕方がないので、音楽をガンガンかけて踊っていた。そこへ来たのがお姉さんで、明日から高校の学年末試験なので、勉強しなくてはならない。紛争ワーカーとして、

あなたたちはこの姉妹にどのようにアドバイスするだろうか？

問題3

A子さんのお母さんが、彼女の歳にはとても若すぎる嗜れ着を着ておめかししている。あなたにはめてもらおうとやって来て、「これ、どう？」と聞くお母さんに、A子さんは正直に答えたい。でも、お母さんに対して思いやりのある言葉を返したい。紛争ワーカーとして、あなたたちはA子さんにどのようにアドバイスするだろうか？

問題4

W大学では、学生が夜中に騒いでうるさいとの苦情が近隣住民から複数寄せられた。紛争ワーカーであるあなたたちに対して、学長から、良いアドバイスを求められている。学長、学生、住民のそれぞれのゴールを考え、共通の上位目標を考え、問題を創造的に打開してみよう。

問題5

エクアドルとペルーの間ではある地域において河を国境としているので、河の流れが変わるたびに国境線が変化する。一九四一年以来、何度も戦争によって決着をつけようとしたがうまくいかなかった。両国の高官から解決法のアドバイスを依頼された、紛争ワーカーであるあなたたちはどのようなアイデアを提供するだろうか？